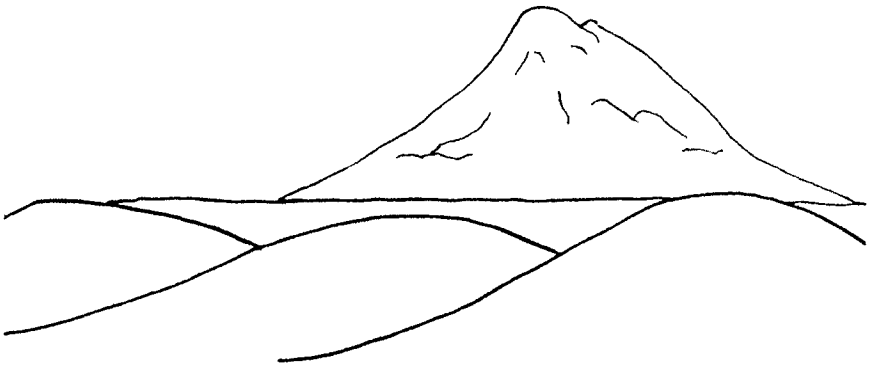
北スラウェシ日本人会
NOTH SULAWESI JAPAN CLUB

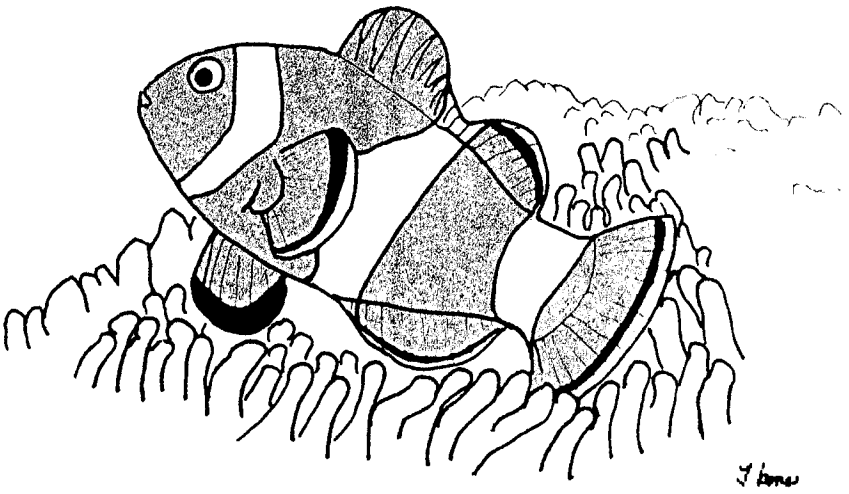
日本人会会報

Tarsius

タルシウス



第11号



目　次　　ページ

1.	総領事挨拶	後藤　昭	1
2.	着任挨拶	竹森祥則	2
3.	着任挨拶および領事連絡について	佐藤祐二	3
4.	鳥インフルエンザに関する注意	日本大使館	4
5.	異環境下での４４年	石野　赫	6
6.	日本語研修センター開校	日本語研修センター	9
7.	インドネシア人が日本で働くには？	上杉祐子	１１
8.	Kita so mo pulang ke Japan	吉田朋子	１２
9.	日本人墓地と海軍慰霊碑（報告）	長崎節夫	１３
１０.	インドネシアと私とキリスト教	青木次郎	１５
１１.	椰子酒	長崎節夫	１７
１２.	編集後記		１９

早いもので、当地に着任して１年が過ぎました。
昨年度は、私と先方の双方の都合がつかず北スラウエシ州への公式訪問を実施することが出来ず、従って、北スラウエシ州日本人会の皆様にお会いする機会を持てませんでした。本年度は是非とも実現させたいと思っています。

インドネシアでは、、昨年度も様々な事件・事故が発生しました。北スラウエシ州日本人会の皆様は、基本的には無事にお過ごしのことと存じます。これは偏に、皆様が平素より、当国の法律を遵守し、現地の文化・慣習等を尊重されていることによるものと思っています。また、インドネシアでは、今まで鳥インフルエンザのヒトへの感染による死者２０余名が出ています。幸いにも、北スラウエシ州では、今まで感染者及び感染死者が出たとの報には接していませんが、皆様におかれましては、普段から、鳥フルに感染しないよう十分に気をつけて頂きたいと思います。

昨年、北スラウエシ州では、州知事・副知事及びビドゥン市長選挙が実施され、それぞれ新体制で州及び市の運営が行われていると思います。皆様ご承知のとおり、北スラウエシ州ではキリスト教徒が人口の多くを占めていることもあり、イスラム教徒との間で軋轢は生じていません。従って、北スラウエシ州は概して治安情勢が良いと言われており、インドネシアの他の地域程にはテロの脅威等は無いと認識しています。但し、前述しましたように、鳥インフルエンザ対策には、十分に注意を払ってください。

最後になりましたが、近い将来、皆様にお会いできる日を楽しみにしております。

在マカッサル日本国総領事
後藤　昭

TOTAL P.02

在マカッサル日本国総領事館
領事　竹森祥則

昨年２００５年９月に赴任してまいりました。総領事館では、インドネシアの政治や治安情勢、広報・文化などを担当しており、今年４月からはマカッサル日本人会の理事の役割も果たすこととなりました。在マカッサル日本国総領事館は、スラウェシを含む東インドネシア地域を所管地域としており、当館から北スラウェシへ出張で訪れる機会もあるかと思いますのでその際にはよろしくお願いします。

首都ジャカルタの街を見ると、高層ビルが林立し、大きなショッピングセンターが幾つもあり、各地の道路を渋滞させるほど沢山の車が走っていて、これらの様子はインドネシアの発展振りを感じさせるものがあります。そのような発展振りは地方都市にも徐々に波及し、地方でも人々の暮らしは随分豊かになってきているように思われます。こうしたインドネシアの経済発展は、外国投資や貿易など日本をはじめとする諸外国との経済交流が大きく寄与していると思われます。また、これまで感じたことは、日本政府やインドネシア政府、あるいは民間機関のプログラムで留学や研修、交流プログラムで日本に滞在した経験のあるインドネシアの方々が増えていて、日本語を話したり日本のことをよく知っている方にお会いする機会があり、人の往来も随分増えていることです。

日本とインドネシアとの間は、経済関係ばかりでなく人的交流もかなり高まっていて、両国はますます近しい関係になっています。今後、この関係がさらに進展していくことができればとよいと思っています。

着任挨拶及び領事連絡について

在マカッサル日本国総領事館
佐藤祐二

北スラウェシ州日本人会の皆様、初めまして。在マカッサル日本国総領事館の佐藤祐二と申します。横山の後任として、昨年３月２２日に着任致しました。北スラウェシ州日本人会の一部の方には既にお会いし、また、一部の方にはお電話にてお話させて頂き、更に当館から発出しております「総領事館からのお知らせ」は、基本的に私のメールアドレスから発信させて頂いており、「いまさら・・・」という方もいらっしゃるかと思いますが、初めての方もいらっしゃると思いましたので、今回の寄稿を機会に改めましてご挨拶申し上げたいと存じます。

まず挨拶は置いておいて、２月中旬に北スラウェシ州を襲った大雨の被害は大丈夫でしょうか。洪水、地滑り、橋の崩壊など大変だったと伺っております。皆様がご無事だったことをお祈り申し上げます。

さて、昨年３月に妻同伴で着任し、特に大きな事故も無く一年が経ちました。とりあえず「ほっ」としておりますが、決して気を抜かず、常に周囲にアンテナを張り巡らし、業務に、また生活に充実した日々を過ごせればと考えております。

総領事館の業務では、領事業務も担当させていただいておりますので、皆様に直接関係ある事を二点ほど以下に記載させて頂きたいと思いますので、ご理解とご協力のほどお願い申し上げます。

①旅券について

本年３月２０日よりＩＣ旅券が導入されました。旅券にＩＣチップを搭載し、旅券の偽変造や別人による不正使用防止の効果が期待されております。具体的には、旅券の真ん中ほどに、厚紙程度のシートが入り、そのシートの中にＩＣチップが組み込まれており、ＩＣチップには、身分事項ページの顔画像、氏名、生年月日、旅券番号、発行国などが記載されます。

今後発給する旅券は原則ＩＣ旅券となります。また、ＩＣ旅券への切り替えは、現在お持ちの旅券の残存有効期限に関係なく切り替える事が可能ですが、新規旅券発行手数料と同額の手数料が必要となります。

〔10 年旅券 Rp.1,455,000-、5 年旅券 Rp.1,000,000-、5 年旅券（12 歳未満）Rp.545,000-〕

②在留届について

旅券法第１６条により、外国に住所または居所を定めて３ヶ月以上滞在される方は、その地域を管轄する日本大使館または総領事館にすみやかに提出することが義務付けられております。従いまして、まだ在留届を提出されていない方、または、お近くにお住まいの日本人の方で、在留届を提出されていない方がいらっしゃいましたら、ご提出を促して頂ければ幸いです。

北スラウェシ州には、領事出張サービス等でお伺いする事もあるかと思いますが、今後とも宜しくお願い申し上げます。

鳥インフルエンザに関する注意

１１月１７日
日本大使館

－　予防　－

１．鳥類に近づかない
（１）養鶏場、鶏を扱う市場、鑑賞用鳥屋、家禽類飼育家庭及び動物園等への不用意・無警戒な立ち寄りや接触を避ける。
（２）近所に鑑賞用鳥などがいる場合、鳥の状態に異状が見られたら十分警戒する。
（３）鳥類の死体、内臓、排泄物への接触をしない。
（４）生の鳥肉を処理した後は、手および調理器具をよく洗う。

＊なお、鶏肉や卵を調理する際に加熱することも推奨されている。７０℃以上で同ウイルスは死滅すると考えられているからである。しかし、たとえ、ウイルスに汚染された鶏肉を食べても感染する可能性は低いとも言われている。

２．人混みへの立ち入りは最小限にし、外出後には手洗い、うがいなどの通常の感染症予防対策を励行する。

３．通常のインフルエンザ予防接種の推奨。
（１）この通常のインフルエンザの予防接種は、鳥インフルエンザに対する予防の直接的効果は明らかではない。しかしながら、何らかのインフルエンザの症状が発生した場合には、通常のインフルエンザか鳥インフルエンザの何れに感染したかを判断する一つの目安となり得る。
（２）通常のインフルエンザと鳥インフルエンザに同時に感染した場合には、ウイルスが感染者の体内で病原性の強い新型ウイルスに変異するものと考えられているので、そうした可能性を小さくする一つの手段にもなりうる。

－　症状　－
初発時インフルエンザを疑う目安（トリ、ヒトの診断は発症時には不可）としては次のとおり。
　多くの場合（症状が多彩なので明確な基準作成は難しい）、いわゆる風邪様で急激に発症し、次の症状のあるもの。
（１）３８℃以上の発熱
（２）悪寒

（３）全身倦怠感
（４）感冒様症状すなわち鼻漏、咽頭痛、咳、痰のすべてもしくは複数
（５）頭痛、腰痛、関節痛のすべてもしくは複数
なお、鳥インフルエンザは、下痢がみられることがある。

－　対応　－
１．上記症状等インフルエンザが疑わしい場合、早急に最寄りの信頼できる医療機関を受診する。

２．刻々と変化する状況（流行状況、感染の拡大、新型インフルエンザの出現）を早急に察知して、対応を変化させる。

２００６年2月記

異環境下での４４年

石野　赫

「前記」

昨春のこと、１通のファックスが受信機から流れ出た。大学時代の同級生からのもので、本人が今委員をしている同窓会の会報に寄稿せよというものであった。短文で１千字前後、題材は自由で良いからと、親しい間でもあり半ば命令調であった。

小生、短文と自由という言葉につられ、何とかなるわいと軽く考え、即電話にて「受ける」と返事してしまった。しかし、数日経っても良い話題が浮かばない。そこで、再度電話をして「困った。書けない。誰か他に、、、、、」と言い出すと、「海外ではらはらした経験でもあるだろ、それでも書いたら」とのヒントをくれた。再度書く気になって、メモまがいに書き下ろした。それが次の「本記」に転載した「異環境下での４４年」の記述である。思えば、サンベルト下にある発展途上国での仕事は、大小様々なリスクに取り囲まれ、緊張の連続であった。

「本記」

毎年９月も終わりに近づくと、思い出すのが１９６５年インドネシアで遭遇した「９月３０日事件」である。当時、ダム建設の為東部ジャワに駐在、初めての海外勤務でもあった。

１０月１日、早朝から資材調達に出かけていた同僚が町の異常を伝えて来た。これが、前夜ジャカルタで起きた「クーデター事件」の第一報となったことを、その夜、NHK短波放送ニュースをキャッチして判った。

数日後、左翼系ウントン中佐がスカルノ大統領の元で共産政権樹立を狙って立ち上がったが、即刻スハルト将軍率いる部隊に鎮圧されたこと、このカウンター・クーデター部隊が余勢を駆って共産党員やそのシンパ狩りを始めていること、を知った。

そうこうする内に、この部隊がスカルノ大統領を幽閉して後、インドネシア共産党の拠点である中部ジャワで党員を殲滅しつつ、東に向かっていること等の情報が入ってきた。我々がいた東部ジャワも共産党勢力が強いと言われ、この鎮圧・掃討部隊の動きに緊張した。

我々は急遽米や日用品を買い集め生活に備えたり、使用している車に「日の丸」のマークを付けたり、地区軍司令部に日本人の安全確保を申し入れたりして、迫る危機に備えた。その内、川に首の無い死体が流れてきたり、あたりの山間から銃声が聞こえたり、焼討ちにあっている家が見えたりして、掃討部隊の到着を感じた。町では、軍や一般大衆による華僑（この事件発端の影に中国共産党ありと思われていた）への暴行・殺人・略奪も頻発しだした。

しかし、我々の所は多目的ダム建設現場という民衆の為の国家プロジェクトでもあってか、幸い直接被害を蒙ることはなかった。やがて、この赤狩作戦は更に東のバリ島まで進み終わりを告げ、年が明けて事態は終息していった。

後に、この事件での犠牲者はおよそ３０万人と発表されたが、現地であのゼノサイドを目撃した者としては、この数字にかなり疑問を覚えるのである。初めての海外生活で、この血を見る体験は強烈であった。いつまでも脳裏を離れないのである。

実は小生、これで「暴動」に「憑かれて」しまったようである。仕事場所が変わったり、国が変わったりする都度何らかの事件に遭遇し、仕事に影響を受けていた。なかでも大規模なものは、１９６９年にシンガポールでマレー人と中国人の人種抗争に遭遇した事。１９７１年、東マレーシア・サバ州に滞在中、フィリッピン大統領マルコスが同州領有権を宣言、それによるマレー系とフィリピン系の諍いに遭遇した事。また、１９７９年、イランで、ホメイニ革命により、ほぼ完成間近になっていた工事を放棄し、這うほうの体で帰国した事。１９９８年には、再度インドネシアであのスハルト大統領の転覆劇に遭遇した事。等などが強烈に思い出される。

引退して１年、４４年間にわたって異環境下で体験した諸々の危険も、いつしかほろ苦い程度の思い出となった。今は、建設という仕事を通じて途上国の発展に寄与できた事に満足感を覚えるのである。

「後記」

以上が、転載分です。

小生、２００１年９月－２００４年３月、ビトンに駐在し港湾工事に参画したが、その間ポソ、マカサル、バリやジャカルタでテロ事件が発生し、一時緊張し、連鎖反応を意識した。しかし、ビトンは心配をよそに、終始平和であった。幸せな２年半であった。

この駐在を最後に引退した。昨年夏、ビトンを再訪し、担当した港湾施設が十二分に稼動しているのを確認したし、再建後の日本人墓地に参拝もできた。知己を得た友人とも再会し、この上ない喜びであった。帰国後間もなく、待っていたかのように狭心症に見まわれ、大手術を受ける羽目になった。これも無事通過し、改めて元気な孫達に囲まれながら、生きている幸せを今感じている。

しかし、自分が仕事をしてきた国々の事がどうも気になり、新聞の国際面を読む事から始まる毎日を送っている。東南アジア諸国、南西アジア諸国、中東諸国、ブラックアフリカ諸国、など等。それにしても、人の住む所、常に「トラブル」があり、あい変わらず、「人」の進歩を感じないのが寂しい、、、、、

2005年4月14日

インドネシア、北スラウェシ州 「ミナハサ日本語研修センター」が開校

インドネシア、北スラウェシ州ミナハサに建設されていた「ミナハサ日本語研修センター」が完成し、開校した。去る4月8日(金)に開校式が行われ、4月11日(月)から授業が始まった。同センターの施設は、民間の日本人と在日インドネシア人の寄附により建設され、校舎は3教室からなり、別棟に日本人教師の宿舎と事務所がある。

このミナハサは、インドネシアの他の地方と異なり、住民の殆どがキリスト教徒で、インドネシアの大きなキリスト教団体の一つ、ミナハサ福音キリスト教団の本部がある。同センターは、この教団本部の厚意により本部の敷地内に建設された。インドネシアでは、日本人が個人或いは団体で不動産、建物を所有するのが大変難しいため、同センターは、教団に移管され、教団運営のトモホン・インドネシア・キリスト教大学付属機関となっている。

専任教師は全て日本人で、既に日本からベテランの3名が着任しており、5月にもう1名が来る予定である。「ミナハサ日本語研修センター」の教育目標は、1年間で中級レベルを目指し、クラスは多くて17名までの少人数制をとっている。学生は、大学生、牧師、大学教授、その他一般人で、初年度は合計41名で、5クラスを編成することになっている。

インドネシアの日本語教育機関での日本語学習者人口は、8万5千人(国際交流基金、2003年調査)で、韓国、中国、オーストラリア、アメリカ、台湾に次ぎ6番目である。北スラウェシ州の日本語教育を行っている高等教育機関は、マナド国立大学、マナド外国語大学、サムラトランギ大学とマナド国立専門学校で、日本語を学ぶ学生は、現在700人を越えている。また、高校においても第二外国語として学習されている。北スラウェシ州の日本語教育機関への教育指導に、日本の国際交流基金と国際協力機構から3名の日本人教師が派遣されている。

「ミナハサ日本語研修センター」の日本人教師宿舎は、単身赴任用のワンルーム形式、食堂があり、炊事、洗濯、掃除、警備にインドネシア人を雇用している。日本人教師の給与は現地並みであるが、宿舎使用等は無料である。また、この日本語研修センターは、パラボラアンテナを装備、各国のテレビ衛星放送が受信でき、また、ダイアルアップ接続ではあるが、インターネット閲覧、メールの送受信もできる。

このように校舎、教員宿舎も完備しており、専任教師も全員日本人であり、しかも日本政府の援助が全く無く民間レベルで、友好と善意で開校した海外の日本語学校としては極めて珍しい。なお、同センターが現地キリスト教大学に移管されたため、いわゆるキリスト教の献金で設立されたと思われがちであるが、同センターの設立は、その多くが宗教の如何を問わない日本人及びインドネシア人(ムスリムも含む)の寄付によるものである。

同センターの初代校長は創立者の玉井三郎氏で、同氏によると数年後には日本語教師を日本人からインドネシア人に徐々に切り替えていく方針という。

全景（手前が事務所と宿舎）

校舎（後方の建物）

スタッフ一同

スタッフ写真前列右から

- 市村 皓　主任教師（校長代行）
- 玉井 三郎　校長
- 青木 次郎　顧問
- 長谷川 裕子　教師
- 上杉　祐子　教師

後列左から

- フランキー テジョアン　顧問
- ジェルミ ティラヨ　事務長
- ミカエル ライントン　警備
- アンディー スモアル　事務
- ヘルマン ルミンバル　炊事
- エドウィン スマフ　支援者
- 鈴木 文彦　支援者

名称: Pusat Pelatihan Bahasa Jepang "Minahasa"
住所: Bukit Inspirasi Kakaskasen III, Tomohon
95362 Sulawesi Utara, Indonesia
電話: xxxx62-431-315-9969
Fax: xxxx62-431-315-9989
Eメール: kantor-ppbjm@telkom.net

問合せ先: ミナハサ日本語学校基金
広報担当: 鈴木文彦
電話: (0463)21-1941
e-mail: suzukif@mb.scn-net.ne.jp

インドネシア人が日本で働くには？

ミナハサ日本語研修センター
日本語専任講師　　上　杉　祐　子

海外の日本語教育には、勉強した後にどのようにして日本に行き、どんな在留資格で日本に住むかという課題が伴います。もちろん日本語を習っているすべてのインドネシア人が、日本へ行って勉強したり、働いたりすることを希望しているわけではありませんが、日本語学習の目的が日本へ行くことであっても、在留資格取得や費用面のハードルはたいへん高いと思います。 2006 年 3 月にミナハサ日本語研修センターでは、1年間履修した学生たちが初めて終了式を迎えましたが、「日本」への道はまだできていません。

また、正規のプロセスで留学（大学など）・就学（日本語学校など）・研修（企業や地方自治体など）の在留資格をとって日本へ行くことになれば、日本へ行ってからも日本語を勉強する機会に恵まれますが、日本で働くことについて制限のない日系人や日本人の配偶者などの定住者は日本語教育を受ける時間、場所なども提供されていません。 1990 年の入管法の改正でラテンアメリカからの日系人2世、3世の「デカセギ」による日本定住も増えましたが、日本語習得で同様の問題がおきています。 働くためには、それぞれの仕事の分野の資格や専門日本語も必要です。それで日本で働けても、働く職域は単純労働になってしまうことが多いようです。

どこの国でも形式は違っていても出入国管理が行なわれていて、たとえば日本人がインドネシアで働く際には、ヴィザを取って入国し、KITAS を申請するという「やや厄介な」方法ですが、それでも在留資格は取得できます。

一方、インドネシア人の在留資格は、どうなっているでしょうか。 外国人の在留資格は、日本でできる活動、身分などによって次のように分かれています。1．外交　2.公用　3.教授　4.芸術　5．宗教　6．報道　7．投資・経営　8．法律・会計業務　9．医療　10.研究　11.教育　12.技術　13.人文知識・国際業務　14.企業内転勤　15.興業　16.技能　17.文化活動　18.短期滞在　19.留学　20.就学　21.研修　22.家族滞在　23.特定活動　24.永住者　25.日本人の配偶者　26.永住者の配偶者等　27.定住者

これらは「日本に利益となる外国人を受け入れ、不利益となる外国人を排除する」という政策に基づいているのでしょう。しかし、実際には「留学」「就学」で勉強している留学生の資格外活動でしている週 28 時間以内のアルバイトも、技能研修生制度による3年間の研修・実習も、労働力として欠かせません。 また、少子高齢化による就業者減を補うため、年に 60 万人の外国人移民を受け入れたり、人の移動が自由化されたりしなくては、経済力が下がってしまうとも言われています。 ただし、日本は多文化共生社会をめざそうというスローガンは掲げられているものの、まだ積極的な移民政策はありませんし、文化や習慣の異なる外国人が住むのは簡単でないはずです。 「夢のような国」というわけにはいきません。

インドネシアの人たちが、勉強した日本語を使って各人の目的に向かっていけるようになればいいと願っていますが、特に日本で働くことについては、まだまだ懐疑的にならざるをえません。

Kita so mo pulang ke Jepang

The Japang Foundation
Junior Japanese Language Expert
吉　田　好　美

初めての投稿で、帰国報告というのもおかしい話ですが、どうぞおつきあいください。

私はこの２年間、Japang Foundation 国際交流基金からの派遣で、北スラウェシ中等教育機関での日本語教育に携わってきました。　中等教育ですから、高校生に日本語を教えることも仕事ですが、最大の目的は高校の日本語の先生達に日本語および日本語教授法を伝授するということでした。

ひとつの学校にだけ勤務するのではなく、日本語教育を行なっている高校を巡回指導していました。　マナド市内やミナハサ県はもちろん、コタモバグやサンギル島へも行きました。コタモバグは完全イスラムの世界で、マナドとは別世界。　サンギル島はヤシの木やバナナの木がわさわさはえていて、ジャングルジャングルしていますが、キリスト教徒が多くて教会が多い景色は、どことなくマナドっぽかったです。　いつもどんな訪問先でも、生徒達から歓迎を受け、いろんな質問をされました。　日本の高校生の学校生活についての真面目な質問から、「パニキ好きですか？」や「＜風雲たけし城＞や＜欽ちゃんの仮装大賞＞に出るにはどうしたらいいですか？」など、ほほえましい質問まで出て、いつも楽しいです。　また、日本からこんなに離れたところでも、日本語を勉強している人たちがいるというのは、日本語教師冥利につきます。

他にも、高校の先生達を集めて日本語や日本語教授法の研修もしました。　研修は、簡単にいうと「教えるときには行き当たりばったりで教えないようにしましょう。」「授業計画を立て、準備してから教えましょう。」ということを指導します。　教師に限らずどんな仕事でも「計画－準備－実行」というプロセスを踏むのが当然だと、日本人は考えるのですが、こちらの皆さんは必ずしもそうではなさそうなので、その意識のギャップを埋めるのが難しかった。

高校生用の教科書も作りました。　2004年からカリキュラムがかわり、それに併せてインドネシアの教育省と Japan Foundation が共同で新しい教科書を作ることになり、その作業に携わることができました。

プライベートでは、ダイビングのライセンスもとって、ブナケンでのダイビングにもはまりました。　休みの日はもちろん、急に授業がなくなったとき（「今日は校長先生の誕生日パーティです。」「今日は〇〇先生の結婚式です。」という理由で授業がつぶれる）なんかにも、狂ったように潜りに行っていました。　いつもダイビングインストラクターのエリさんにお世話になっていました。　ありがとうエリさん！！

再びマナドの地を踏むことがあるかどうかわかりませんが、これからもこの地で日本語を勉強する高校生や日本語の先生たちが、いつか日本との梯子になってくれることを祈りつつ、私は日本へ帰ります。　皆様、どうかこれからもお体に気をつけて、北スラウェシでの生活を楽しんでください。　またお会いできる日を楽しみにしています。　Sampai Junpa!!

日本人墓地と海軍慰霊碑の管理に関して（報告）

墓地管理委員　　長 崎 節 夫

１・管理のための組織の手直し

ビトゥンの日本人墓地建設に際して編成された「北スラウェシ日本人墓地整備会」は、墓地の完成後、当施設を維持管理するために引き続き「墓地管理委員会」として当施設の管理を担当することになりました。メンバーは現時点で地元ビトゥン在住の大岩（トミ・セムベン）、長崎、東京の石野。これに加えて、沖縄の遺族との連絡や慰霊祭などのイベントの企画も考えられる必要から、沖縄の「スラウェシ島日本人墓地整備会」を当日本人会の沖縄連絡事務所として、引き続き活動していただくことになりました。現地側のメンバーが大岩、長崎の老朽化した２名だけではなはだ心細い限りでありますので　どなたか元気のある方の参加を期待しています。

２・管理の現状

（１）「日本人墓地」は規模もこじんまりしている上に、施行を担当した青山、飯島の両名の献身によって思った以上の霊園に仕上がっており、管理上もたいして手がかかりません。
現在、近所の住民に日常の管理を依頼しており、月額１０万ルピア支払っています。また、昨年１１月に大雨による鉄砲水で西側面の石積みがこわされ、約１０立方米の埋土・砕石が流失しました。これの修復に７２万ルピア支出しています。

（２）「海軍慰霊碑」も当日本人会の管理ということで、総領事館からの管理費補助も両霊園セットになっています。しかし、この霊園は建設の段階で北スラウェシ州政府がからんでおり、用地を含めて施設そのものが形の上では北スラウェシ州政府の所有となっているようです。現在、本来の建設者である元山航空隊有志（幹事　大之木英雄）、在マカッサル総領事館、そして当日本人会の間においては、霊園管理の件は了解事項であっても、やはり施設の所有者である北スラウェシ州政府の了解を得ることが必要かと思われます。どのような手順をふんで州政府の了解をとりつけるか。それほどむつかしい問題ではないと思うので、当事者間で適切な考えてできるだけ早くこの件を処理すべきであると思います。それまでの間、霊園を無管理の状態にはおけないので、暫定的に元山航空隊が管理していることにして、委託を受けた長崎個人が霊園の整備に当たっている、というのが現在の状態です。

３・両霊園の整備計画

（１）「日本人墓地」は前述のとおり、ほぼ完成された霊園になっています。残る課題は、壊れた墓碑の修復と、現在の霊園の雰囲気を維持していくことです。それほどむつかしいこそではないとおもいます。

（２）「海軍霊園」は人里離れた場所にあり、風光明媚、面積も広いので、うまく整備できたらビトゥンの名所になるでしょう。ということで、ない知恵を絞っていろいろ考えています。霊園の整備・美化について皆様のご意見を待っています。現時点では表の道路に面する境界

線沿いと、ゲートから慰霊碑までの階段の両側にブーゲンビリアを植えつけています。境界線の有刺鉄線をブーゲンビリアの生け垣に代える計画です。

この霊園の管理上の問題点は、人里離れた場所にあること、及び隣接の個人有地との関係です。用地回りの有刺鉄線は当初計画で敷設されて現在も一部のこっていますが、園内に侵入するためにこじ開けるだけでなく、どうも有刺鉄線そのものがほしくて切り取っていると思われる部分もあります。盗難防止のために２４時間衛兵をつけるというわけにもいきませんから、盗んだり壊したりする気をおこさせないような雰囲気をもつ霊園に仕立てる、いつの間にかそのような霊園になっている、少々虫のいい考えのようですが不可能なことではないでしょう。

隣接地との問題は、この霊園が見晴らしのよい高台にあるために、裾野を削られたら地崩れの危険にさらされるということです。先般この事例があって（まだ危険解除になったわけではないが）所轄の西ビトゥン警察署から警告を出してもらい、隣接地の工場用地造成工事を中止させています。この問題は引き続き要注意ということでしょう。

４．霊園管理の理念

「管理の理念」などとむつかしそうなことになってきましたが、私個人としては何の理念も持っていません。たまたまビトゥンに日本関係の慰霊碑があって、墓地ができて、一年の大半をここに滞在している我々がいる。「熱心に」とまではいかなくてもできる範囲で霊園の管理運営に協力していく。それでよいのではないかと思っています。我が家の仏壇に気がむいたときにお線香を供えるのと同じ気持ちです。園内はできるだけきれいにして、先輩漁師たち、戦没兵士の御霊を慰めることができたらそれでよいのではないか。

最後に、これは「管理」というより「運用」の問題になるかと思いますが、両霊園が持つ意義は、慰霊・鎮魂ということだけではなく、両霊園を媒体にして日本・インドネシア国民の交流を広め、お互いに理解を深める、そのような「場」であるということです。日常の管理においても、慰霊祭などを催すにしても、このことを絶えず念頭においてやっていきたいと思っています。

インドネシアと私とキリスト教

青　木　次　郎

第二次大戦中、満州の八面通というところにいた私は、南方前線への転属を命じられ、最前線であったハルマヘラ島へ向かう途中の昭和１９年８月２９日、セレベス海で乗っていた輸送船が敵潜水艦の攻撃をうけて沈められ、乗船していた兵員 4000 名の内約半数は壮途半ばにして、セレベス海の海底深く消えてしまったのです。やっと離船できた者たちも救命胴衣一つを頼りに海上を漂流すること３６時間余り、やっと救助されて上陸したのがインドネシアのメナドと言う港町だったのです。　その後一年この地に駐屯していましたが、終戦によってビートンという所に集結させられ、捕虜生活をすることになり、併せて約２年の間この地で生活することになったのです。

メナドという町は、インドネシアのスラウェシ島の北の端にあるミナハサ州の首都で、フィリッピンに一番近いところです。ここの住民は、他のインドネシア人と比較すると肌の色は白く、先祖はモンゴルから渡来してきたのだと称して、顔・形も我々日本人に非常によく似た人が多く見かけられます。

インドネシアの宗教は、全人口の９０％がイスラム教徒と言われている中で、この地域は逆に９０％がキリスト教徒で、残りがイスラム、ヒンズー、仏教の人たちなのです。その為この地域の人たちはミナハサ・ホスピタリティーとも呼ばれていて、とても親切で人なつっこく、大変来客好きな人たちなのです。特に日本人に対しては非常に友好的であります。それは、昔からたくさんの日本人との交流があり、また第二次大戦の時、この地域は最初日本海軍の落下傘部隊の降下によって占拠された所で、海軍の軍政下に置かれていたためであると言われています。　海軍の人たちは現地の民衆を良く理解し、「何事によらず、こちらの考えを押しつけることなく、なべて現地の要求をよく聞くべし」という方針のもとに軍政が敷かれていたということです。またこの地域は最後まで敵の上陸がなく、各部落が戦場にさらされなかったということなどもあって、落ち着いた生活がなされていたと思います。

とかく戦時中は多くの日本の軍人も官吏も、現地住民の要求など無視して、すべて押しつけることしかしなかったという中で、メナド駐留の海軍部隊がこのような方針を持って占領地を治めていたということは立派であったと思います。特にミナハサ地方はキリスト教徒の多い所で、住民生活指導のため、海軍軍政部は日本キリスト教団に、司政官のアシスタントとして日本の牧師の派遣を要請し、日本から数名の牧師がメナドに来ておりました。それはキリスト教の布教のためということでなく、当時敵国であったアメリカ、イギリス、オランダ等がキリスト教国で、キリスト教をしんじている者は皆敵国人であるという考えをもつ日本人が多い時代であったので、インドネシアの中でも特にキリスト教徒の多いこの地域を治めていくには、まず、キリスト教を理解しなければならなかったからではないでしょうか。

また、インドネシアでは総人口の９０％の信者を持つイスラム教の人たちの中には、キリスト教に反感を抱いている人が多く、ボルネオ島に於て開戦当初、日本軍の侵攻を利用してキリスト教の弾圧が計画され、日本軍への密告によって２０００人以上のキリスト教徒が殺戮されるという事件（金田著「拒絶の理由」）が起きたばかりであったので、同じ過ちを繰り返さないようにという事もあったのでしょう。いずれにしても日本は宗教的なことでは差別しないということを知らしめていく必要があったのだと思います。

当時この地に派遣された東京鳥居坂教会の浜崎次郎牧師は、当時を回顧して次のような手記を残しておられます。　「ミナハサでは学校でも病院でも特にキリスト主義という必要はなく、すべてキリスト者でした。師範学校でも、農学校でも、男女各中学校でも、もともと教師も生

徒もキリスト者でした。私は今までの８０余年のうち、大正７年神学校を卒業以来、５０余年の教会と伝道の生涯を顧みて、戦時中のミナハサの人々と過ごした約２か年ほど、悔いのない生き甲斐を覚えたことはありません。初めから終わりまで全く摂理的な神のお恵みであったと感謝のほかありません。ときおり「ドミネハマザキ」と呼ばれましたが、そんな敬語で呼ばれると、こそばゆさを感じました。多分オランダ人が牧師に対する敬語として呼ばせていたのでしょう。　海辺の漁村や山間の小部落まで、馬車も通れない細い道は馬に乗って巡回したものです。至る所で歓迎されました。私はただ教会の議長だのアシスタントを連れて行き、「日本の憲法第２８条では国民は信教の自由が許されており、日本の敵国がキリスト教国であるからといってキリスト信者を誤解したり、迫害したりすることは間違いである。そのために私は皆さんが迷惑したりする事のないように派遣されてきたのです。」と私の使命を述べるだけで彼等は安心し、私は歓迎されたというわけです。」と。

私は当時のこのような思いやりがあってこそ、今のミナハサ地方における友好、交流が保たれてきたのであったと思っています。　こうして振り返ってみると、戦中、戦後を経て現在に至るまでの、北スラウェシに於けるキリスト教の趨勢には素晴らしい進展があることを覚えます。先にも述べたように、住民の９０％のキリスト教徒がいて、キリスト教国とも言えるような社会を形成している、そんなミナハサにおいての戦時中、兵隊としての生活でしたが敵機の空襲さえなかったら本当に天国にいるといっても過言でないくらい平穏そのものでした。現地の人々との交わりも、民族意識を捨ててお互いが信じあうことのできた生活であったと思っています。そのため遠く時を経た今でも、戦友たちの中にはミナハサは自分の第二の故郷であるあると言っている者が多いのもわかるような気がします。それは、海没から助けあげられ、再びこの地に生き返ったというだけでなく、ここで過ごした２年間の現地の人々との交わりの中にいつしか親子兄弟のようなつながりが生まれたためではないかと思います。

私は終戦後日本へ引き上げてからも、この地のことが忘れられず、いつかは戻ってこの地で暮らしたいと思っていたのですが、帰国後の２０年くらいは敗戦日本再建のためただ夢中になって働き、やっと生活も安定してきて再びここメナドに対する思いが強くなり、かつての戦友たちに声をかけて一緒に来たり、一人で出かけてきたり、もう何十回も行ったり来たりして今はとうとうメナドに家を建てて、一年の半分くらいをメナドで過ごしております。　初めの頃は戦争中の知り合いもたくさんおりましたが年々その数は少なくなり、反面、新しく知り合う人がたくさん増えて本当に故郷に帰ったような気持ちで過ごしております。

椰　子　酒

長崎節夫

ジャカルタやマカッサルなどから空路メナードに達すると、まず感じることは景観の違いです。地形が平坦で樹木が少ないジャカルタを出発して、起伏に富んだ地形に緑が濃く、空気も清澄なミナハサの地に降り立つと、ジャカルタでたっぷり吸い込んだ排気ガスによって汚染された肺もすっかり浄化されて、体は健康モードに切り替わります。

メナード空港からビトゥンまで約１時間の道中で、この緑の世界の正体を見てみましょう。沿道に目立つ樹木はココヤシ、マンゴ、ランプータン。パパイヤ、ナンカ、ドリアンも見えます。竹林あり丁子林あり。民家のある場所は果樹が多く、人里はなれた場所は椰子林丁子林が多いようです。

「豊かな自然」という言葉を実感させられます。山に行けばヤシの実が繁り、海には魚が泳いでいる。このような土地では、間違っても餓死者がでることはないでしょう。ここの住民は（私もふくめて）能天気で幸せな人が多いのも、この自然環境のせいだと思います。

メナード空港からビトゥンへ向かう道は、標高２０００Ｍのクラバット山（メナード富士）の南・東側を迂回して通っていますが、この山の裾野は圧倒的にココヤシの世界です。ミナハサ半島はインドネシア随一のココヤシ地帯です。山手のココヤシと東海岸側斜面の丁子は、ミナハサ半島における林産業の双璧といえます。

ヤシ産業ー　第一はヤシ油の生産。ビトゥンの町に入ると、どこからともなくヤシ油の匂いが漂ってきます。ビトゥン港から積み出される産品の第一位はヤシ油でしょう。ヤシ関連産業と言ってもヤシ油の生産がほとんどで、あとはそれに付随する程度のものでしょう。しかし、椰子の実の、油を削ぎとったあとの殻の利用をみても、これは調理用燃料として一般的に使用されているところから、北スラウェシ一帯で燃料として消費されているヤシ殻の総量は莫大な量になるのではないかと思います。また、椰子の実がヤシ油加工原料として使われる前の段階ー即ち椰子の実がまだ青く、殻の内部が果汁で満たされてている時期の椰子の実は、もちろん「飲料」として消費されます。ヤシの実はほとんどどこにでもぶら下がっているものですから、地元の人々は気楽に水がわりに飲んでいますが、我々からみると、それこそ正真正銘の天然ジュースですから、もったいなくていいかげんな飲み方はできません。

以上述べたことは大体ココヤシの世界のことですが、ミナハサ半島には「ココヤシだけがヤシではないぞ」と、存在を主張している椰子があります。インドネシア語で Aren 、日本では「さとうヤシ」とよばれているようで、広辞苑にものっていますので引用します。

砂糖椰子・・ヤシ科の常緑高木。インド・マレー原産。高さ７～２０Ｍ。葉は巨大な羽状複葉。雌雄同株。つぼみのとき花序の軸を切り、流れ出た樹液から砂糖、椰子酒をつくる。サケヤシ。（広辞苑）

これより本題に入ります。

砂糖椰子（アレン）は一見ココヤシに似ていますが、「葉っぱ」と「実」の形状で識別できます。ココヤシの葉は葉柄から左右両側にきれいに櫛けずられたように緑の葉が下がっています。鳥の羽毛を二つ折りにしたような形です。アレンの葉も基本的にはこの形ですが、葉柄から出る葉っぱが整然とそろわなくて、乱杭状つまりバサバサになっています。このような葉の状態だけでも識別できますが、「果実」の形状も全く異なります。ココヤシの実は、よく知られているとおり椰子の幹のてっぺんにヒトの頭大の実が、ひと房だいたい１０個くらいのグループでぶら下がっていますが、アレンの実はピンポン玉か鶏卵くらいの大きさで、ひと房に数

１０個から１００個以上もびっしり付いています。この実ができたての頃、房の茎（花序）をゆすったり棒切れでたたく。これを４～５日毎夕続ける。迷惑な話です。暴力をふるっておいてしまいにはその茎をバッサリ切りおとす。そうすると茎の切り口から樹液がしたたりおちる。この樹液を竹筒などの容器に受けて集め、これを煮詰めて造ったのが地元で「グラメラー」とよばれている砂糖です。煮詰めた液を成型する際に椰子の実の殻を使うらしく、パサルやスーパーマーケットで売られているグラメラーは扁平な椰子殻のようになっていました。　棒状にできているのもあります。粉末状のも見ました。先日、メナードのスーパーマーケットで購入した砂糖は３００ｇの棒状で GULA ALENG と書いてありました。包装もしっかりしていて、そのプラスティックフイルムには用途、賞味期限も印刷されています。製造元は東ジャワの会社でした。価格は 8,250 ルピア（300g）。同じ棚に置かれているグラニュー糖は 6,475　ルピア（１kg）ですから、単位重量当たりの価格はグラニュー糖の約４倍になります。この砂糖の食感は沖縄の黒糖とほとんど同じです。

砂糖椰子アレンは上述のとおり、その名にふさわしく「砂糖」を産みだしていますが、ミナハサ半島では隠れた特産ともいえそうな他の商品も産んでいます。

椰子酒（地元ではチャプティックスと呼ばれる）は、アレンの樹液を発酵．蒸留した強烈なアルコール飲料です。しかしこの酒は、グラメラーが大手をふって表街道をあるいているのに対し、日陰者の身に甘んじています。アレンの樹液は製糖工場に運ばれるか、酒造工場に運ばれるかによって運命がわかれることになります。

実は、私も椰子酒の醸造場なるものをまだ見ていません。身近にあるにちがいないが姿は見えない。しかたがないので周囲の友達に聞きました。皆よく知っていて、聞かないことまで教えてくれます。それによると、椰子酒の製造工程は－工程というほどのものでもないが－以下に記すとおりのようであります。

１．半切りのドラム缶と竹筒で蒸留装置を造る。
半切りドラムを土間に据え、ドラムの下の地面は薪（ヤシ殻）がくべられるように適当に穴を掘っておく。長い竹の筒（長さ７～８Ｍもある竹を割らずに節だけつぶして竹のパイプを造る）をドラムの上からはじまってそのドラムの手前までくるように方形に繋ぎあわせる。竹パイプは長いので、ドラムのある部屋から一旦屋外に出て小屋の回りを半周あるいは一周して、また屋内に戻ることになる。ドラムの蓋は円錐形のとんがり帽子にして、てっぺんに穴を開け、そこに竹パイプの一方の端を連結する。ドラム缶のナベで発生したアルコール混じりの蒸気が竹パイプ回路に入っていくように繋ぐわけである。半切りドラムは蒸発器、竹のパイプは凝縮器、簡単明瞭、究極の酒造装置です。

２．準備万端整ったところでアレンの樹液を集め、ドラム缶ナベに入れる。この原液は三日目くらいになると自然に発酵します。そこでナベの下に火を入れて原液を加熱します。加熱は手加減しなくてはならない。沸騰させたらだめだそうです。

温められた原液は盛んに蒸発し、蒸気は竹パイプ回路に送りこまれる。回路の中を通るあいだに冷却されて液化する。その液が回路の一方の端からポタリポタリと落下する。　これをポリ缶やバケツに受けて一丁上がりというわけですが、時々酒造見習のチュー吉が、酒の出来具合を確認、といふことでポリ缶の受け口で味見していたりして。あ、椰子酒をチャプティックスと言うのはこのことであったのか！（余計な想像はやめましょう）

おわり

編集後記

前号発行から早くも８か月がすぎました。「年２回刊行」を目標にしていますが思うようにはいきません。会報の役割を考えたらあまり長く間を置かずに（少なくとも年２回は）発行すべきだと思うので、老骨に鞭打ってやる以外にないと覚悟しています。

在マカッサル総領事をはじめ総領事館のスタッフは昨年の今頃入れ代わって、私も個人的にはパスポートの切替えその他でお世話になっていますが、総領事の挨拶文にもあるとおり、当地に出張する機会をつかみかねているご様子です。できるだけ早い機会に来られて（チャプティックスはともかく）ミナハサの空気も吸っていただきたいと思っています。今号には総領事だけでなく、竹森領事、佐藤さんのご寄稿もいただきました。今後とも総領事館便りや個人的なおいしい情報などご寄稿を期待しています。

前号に引き続きトモホンの日本語学校関係のご寄稿をいただきました。上杉さんは外地での日本語教育の現場から見た日本の入国管理制度の問題まで論述しています。地球規模での生活環境の急激な変化によって、日本の入国管理制度も大きな過渡期を迎えていると思います。管理当局だけでなく、様々な立場から問題を提起して、日本の入管制度をできるだけ望ましい方向に導いて行く。今はそのような時期ではないでしょうか。

国際交流基金の吉田さんもタイミングよく捕まえることが出来て、日本語教育現場の声を寄稿していただきました。上杉さん、吉田さんの原稿を読みながら思ったことは、（アテネオリンピックのときもつくづく思い知らされたことですが）日本で強くなったのは本当に女性だけであった、ということでした。相対的に男性がだらしなくなっている、ということであります。

上杉さん、吉田さん以外にも北スラウェシで活躍している大和撫子がまだいます。今回は連絡がとれずにパスしましたが、玲子さん、勝見さん、次号では必ず書いて下さい。「海の世界特集」会員の皆様、乞うご期待。

東京の石野さんは長年の外地勤務で疲労がたまったのか、昨年末にドック入りして大修理をおこないました。療養中の大先輩に対しても無理矢理に原稿をお願いして申し訳ありませんでした。修理がすめば石野さんはまだ７０歳前のバリバリです。いままでの貴重な体験を、「タルシウス」にもまた他の本にもいっぱい書いてください。

「７０そこらで年よりづらされたらわたしはどんな面すればいいのかね」と青木さんのたんかが聞こえてきそうです。日常の節制もあるでしょうが、ミナハサの空気が青木さんの健康維持に大きく貢献しているとおもいます。不肖長崎は健康的なミナハサ地方の不健康な飲み物「チャプティックス」について駄文を呈しました。

表紙はいつものとおり羽根井さんです。メナードトゥアを眺めているのは、シーラカンスではなくてクマノミでした。